

編集後記

ここに *Acta Tibetica et Buddhica* 第 12 号を刊行する。4 月より本務校における職務が変わり、研究ばかりを行うこともできなくなってきた。勤務先が大きな大学だとそのような立場も回ってこないのだろうが、小さな大学だと全ての職務が回ってきてしまう。早いうちに他の職場を探しておけばよかったのだろうが、いつものことながら、気が付いた時には手遅れである。身延山大学の場合、地方で、小さな大学で、特殊な教育内容という大学経営において非常に厳しい環境にある。山梨県内の受験生の数は 18 年後まで予測可能であり、日蓮宗教師志望者数の推移も把握できており、本学が対象とする市場数はほぼ把握できている。この少ない数を競合校である立正大学仏教学部と取り合っているわけである。

ただし、このような状況にあるのは本学だけではなく、国公立大学や大手私立大学においても文学部への進学者数が問われており、海外ではインド学の講座が閉じられている。数年前に地元の新聞の取材で、仏教を研究する社会的意義を繰り返し聞かれた。もちろん、古代インド・チベット語で書かれた文献を解読して、その思想を現代社会に提言することは十分に意味があることであるが、多くの若い世代の人たちはそれに価値観を求めているのであろう。このようなことから、身延山大学に学生を集めるだけでなく、若い世代に仏教学の面白さを伝えていくことも考えなければならず、もはや研究などしている場合ではなくなっている。なんとなく愚痴ばかりとなってしまうが、ATB を編集し続ける時間も取りにくくなってきた。そのような中でも、今号には 2 本の論文を投稿いただいた。

計良龍成先生には、ATB2、ATB9 に続いて、*Madhyamakāloka* に関する論考を寄稿していただいた。同論に関しては、一乗真実における彼の法華經理解について個人的に興味があるのだ、本稿では『入楞伽經』の引用を巡る問題を扱っている。詳細については本文を見ていただければいいのだが、*Kamalaśīla* の著作の諸版を丁寧に読み解いたからこそ明らかにできたことが指摘されている。また、ここで扱われるチベット語訳の問題点は、チベット語の翻訳文献を読む上でも注意すべき点であることも認識しておく必要がある。

槇殿伴子先生には、ATB4、ATB8、ATB11 に続いて、寄稿いただいた。これまでの研究テーマとは異なり、今回の『マニ・カンブン』に関する論考は、2018 年度より科学研究費の助成を受けた「チベットの埋蔵經典に描かれた建国神話伝説に置ける仏教思想の研究」の成果の一部である。本論は、同書におけるゾクチェン、マハームドラ一、大中観を自心仏から考察することで日本仏教の本覚思想との類似にも言及している。このような論点は、袴谷憲昭先生の「チョナン派と如来蔵思想」（『岩波講座東洋思想第 11 巻 チベット仏教』）と『本覚思想批判』に繋がるものでもある。

拙稿は、平成31年に開催された第71回日本印度学仏教学会の発表の際に配布した資料にテキストを加えたものであり、学会誌に投稿した英文論文と対になるものである。Dīpaṃkaraśrījñāna に関するこれまでの研究を「ディーパンカラシュリージュニャーナ研究」としてまとめた時には、彼の密教文献の一部しか解読できていなかった。その後、彼の密教文献の調査を継続するにあたり、まず彼の儀軌文献を調査した。その際に、彼の *Citāvidhi* を読んだところ、ここで扱う「13のマントラの流儀」を発見することができた。それは喜ばしいことでもあったが、学位論文で取り上げた彼の著作リストに未記入の文献があることもわかった。チベット大蔵経の目録にある著者不明文献を見落としていた訳だが、蔵外文献も調査すると、彼に帰せられる著作はまだ増える可能性がある。また、それらの密教文献には個人的に読めないところが多くあり、難渋している。顕教文献に比べて使用される語彙が豊富であるだけでなく、比喩の使用法や言葉の背後にある意味が理解し難く、さらには、実際の儀礼や行の体験なしに、文献の文字だけでは理解できない点も多くある。本稿でも怪しい読みがそのままとなっているが、訂正すべき点をご教示いただければ幸いである。

最後に、本誌の編集に時間が取れずに掲載論文数が少なくなっているが、原稿は常時受け付けているので、投稿希望者には連絡いただきたい。

望 月 海 慧